新型コロナによる急性脳症で子供死亡　医師が特徴や注意点を指摘

2022/6/4　毎日新聞

新型コロナウイルスの感染による小児の急性脳症が栃木県内で 2 例あった。4 月下旬に 10 歳未満の女児が死亡し、5 月中旬には 5 歳未満の女児が重症化して体にまひが残った。日本小児神経学会は、新型コロナ感染による急性脳症の全国の事例を今後、調査する。治療にあたった医師に特徴や注意点などを聞いた。

「自治医大付属病院で小児の新型コロナウイルス感染者の重症例は初めてだった」と語る村松一洋・自治医大小児科准教授＝栃木県下野市の自治医大で2022年5月9日午後4時11分、御園生枝里撮影

基礎疾患なく容態急変

栃木県や自治医大（同県下野市）によると、死亡した 10 歳未満の女児は新型コロナの検査で陽性となった当初は発熱などの軽症で自宅療養していた。だが、容体が急変し、病院に救急搬送。集中治療室で治療したが死亡した。女児に基礎疾患はなかった。治療した自治医大小児科の村松一洋准教授によると、新型コロナによる急性脳症で 10 歳未満が死亡したのは国内では初めてとみられる。

重症化した 5 歳未満の女児は自宅で激しいけいれんや高熱、意識障害が起き、運ばれた病院の新型コロナの検査で陽性となった。命は助かったが、体にまひが残った。この女児にも基礎疾患はなかった。

ウイルス感染が発症要因

急性脳症は新型コロナに限らず、ウイルスや細菌などの感染症をきっかけに、脳が急激にむくみ、主に意識障害などが起きる病気。年齢別では小児の発症が多い。原因は免疫機能が制御できなくなる「サイトカインストーム」や、けいれんにより神経伝達物質が過剰に放出され神経細胞死が起こる「興奮毒性」などと考えられている。

村松准教授は「急性脳症はウイルス感染が発症要因となるので、新型コロナでも感染者が増えれば急性脳症患者も出てくると思っていたが、『ついに出てしまった』という思いだ」と話す。

急性脳症には、発症して急激に状態が悪化するものや、けいれんが重篤なものがあるといい、「死亡した女児は急激に悪化する型で、当初から入院していても救命は困難だったのではないか」と説明する。

この女児は新型コロナのワクチンが接種できる 5 歳以上だったが未接種だった。ワクチンは一定の新型コロナの感染予防効果が報告されていることから「5 歳以上は接種を検討した方がよい」と勧める。県によると、亡くなった女児の保護者も、県が死亡例として公表する旨を説明したところ「怖がらないでワクチンの接種も考えてほしいと伝えていただき

たい」と話したという。

米国でもコロナ感染者の脳症で死亡報告

厚生労働省によると、新型コロナ感染者の死者数は5月31日時点で3万629人、うち10歳未満は6人。米国でも新型コロナ感染者が脳症で死亡したという報告がある。

米医師会雑誌「JAMA　Neurology」に掲載された論文によると、米国で2020年3〜12月に新型コロナの検査で陽性になり入院した21歳未満の患者1695人のうち、脳や神経の症状が記録されていたのは365人（22%）。そのうち322人は一時的な症状だったが、43人は命に危険を及ぼす状態まで進行、うち11人が死亡した。43人のうち15人は重度の脳症で、うち4人が死亡した。15人の内訳は、1歳未満1人▽1〜2歳1人▽3〜5歳2人▽6〜12歳5人▽13〜17歳6人。

日本小児科学会の2月20日までの中間報告によると、登録された15歳までの新型コロナ感染者5129例のうち、急性脳症は2例。5〜11歳と12〜15歳で、20年2月〜21年7月の流行初期の発症という。

注意点は？

まだ解明されていないことも多いが、子どもが自宅療養をする場合、どんなことに気を付ければ良いだろうか。村松准教授は「子どもの変化に早く気付くことで早期に治療し、重症化を防げる可能性がある」と話す。「普段と違う様子が見られないか」を注意深く観察することが重要という。例えば、ぐったりしている▽声をかけないと寝てしまう▽会話が成り立たない▽普段は落ち着いている子が興奮している――などが確認される場合、医療機関の受診や夜間休日の小児救急電話相談「＃8000」の活用を呼びかけている。【御園生枝里】